パリのチマルパイン

篠原　愛人

[要約]

フランス国立図書館所蔵のチマルパインの『日記』がデジタル化され、オンラインで閲覧が可能になった。翻刻では不明瞭な抹消箇所や修正部分も、加筆部分の文字や空白部の大小、インクの色の違いなども、おかげでよく分かる。本稿ではそのような「加工」部分を分析し、『日記』の成立過程について考察した。

大半のページは整然としており、『日記』が「最終段階に近い稿」であること、下書きを写したであろうことも見えてくる。転写したことは、抹消箇所からも指摘できる。また「日本」という語の綴りが 3 段階（4 通り）に変化し、一部は上書き修正されていることも、今回、初めて分かった。綴りの変化は、ある研究者が言うように、チマルパインの作品の成立年を推定する手掛かりになる可能性があり、その場合、『日記』の果たす役割は大きい。しかし、その前にクリアすべき問題がある。

本稿では、チマルパインの生活拠点であったサンアントニオ・アバー教会に関する本文記事と加筆文を分析し、彼がこの教会の先行きを不安視していたことを明らかにした。実際、1624 年に同教会は存続の危機に陥り、チマルパインの生活環境も変化したと思われる。

『日記』には、16 世紀のメキシコで「生ける聖人」として尊敬されたグレゴリオ・ロペスに関する 3 つの加筆文（珍しくスペイン語）があるが、それらがいずれもフランシスコ・ロサの著したロペスの『伝記』からの引用であることを確認した。

はじめに

メキシコの先住民史家チマルパイン（1579～16??）の『日記』をめぐって、筆者はこれまで3点の論考を発表してきた(1)。ただ、その際に依拠した史料はパリのフランス国立図書館（Bibliothèque nationale de France 以下、BnF と略す）所蔵のオリジナル手稿（Manuscrit Mexicain #220）ではなく、同手稿をもとに翻刻されたナワトル語テクストと、そのスペイン語訳（以下、翻刻テクストを含め、「テナ版」と略す）および英語訳のテクスト（同じく、「英語版」と略す）であった(2)。

ところが最近、BnF 所蔵の古文書のデジタル化が進み、チマルパインの手稿もオンラインで閲覧できるようになった(3)。「ほぼ生」の手稿を見て受ける第一印象は、チマルパインの手稿を直接知る人の多くが述べているように、文字の美しさ、読みやすさである。パレオグラフィの素人でも初見でほとんど読むことができる程、分かりやすい明確な文字で綴られている。文字の大きさ・行間・上下左右の余白など、全体のバランスも絶妙である。あまりにも整然としており、『日記』は下書き原稿を清書した最終段階に近い稿だとの思いを強くする[図版 d、e]。

その一方で、空白のまま残された部分や、抹消・修正・加筆なども少なからず見られる。上で「最終段階に近い稿」と言ったのもそのためだが、テナ版でも英語版でもそのような加工部分がある場合はほぼその都度、指摘され、翻刻テクストに反映されている。もっとも抹消部分については、元の語句が太い線などで消され判読が困難な箇所もあり、どちらの翻刻テクストでも抹消された語句に関する指摘は少なく、脚注もほとんど付されていない。抹消箇所の復元となればなおさらである。そこで本稿では、チマルパインの『日記』の BnF 手稿に見られる、以上のような加工箇所を中心に分析していく。

旧稿でも述べたように、チマルパインの『日記』はあくまで通称であって、決して日々の出来事を書きとめた日記ではなく、『第七報告書』の続編の草稿とでも捉えるべきであろう（ただし、本稿では便宜上、『日記』と呼ぶ）(4)。何より彼の生前の出来事から始まっているのがその証である。『日記』の執筆時期もはっきりしない。1609年以降の記述は実際の出来事と執筆した時期はあまり離れていないと思われるが、どれほどの時間差があるのかを判断するには、決め手に欠ける状態である。そこで本稿では前述のような加工箇所を分析し、この手稿の作成プロセスを解明する手掛かりが得られることを期待する。

I.　空白部

空白部とは、執筆時にチマルパインが適切な語句を何らかの理由で見出せず、数文字分をブランクのまま残した箇所を言う。『日記』全体で25カ所の空白部分がある。本来もっと多くの空白部があった可能性があるが、そのうちのいくつかはチマルパインがすでに埋

めたと思われる[図版 a][5]。

表 1 を見て分かるように、空白部のほとんどは人名（ローマ教皇や副王から、メキシコ市の先住民役職者まで）か、日付に関するものである。執筆（あるいは転写）時に、思い出せなかったか、もとの資料に記載がなかったか、彼が間違っていると考え、後で確認して書き入れるつもりだった部分である。彼の逡巡を示唆するメモと思しきものもある[6]。ブランクのまま残っているのは、1600 年前後に 3 件、史的回顧（1608 年）以降が 22 件で、後半に偏っている。これは『日記』の前の方から見直しが行われたためとも思えるが、それと反対のことを示す痕跡もある[7]。

表 1　　チマルパイン『日記』の空白部

年	人名	日付	他	年	人名	日付	他
1599			○	1610	○×5		
1600	○			1611	○		
1602		○			○		
回顧			○	1612	○		
1609	○×2				○		
	○			1613			○×2
	○				○		
		○		1614	○		
1610	○				○×2		

同じ日付の同じ記事に複数の空白部がある場合、その個数を× n で表わした。

空白のまま残した理由として、ただ単に確認を怠ったため、確認できる材料が乏しく、判断を保留しているため、情報は複数あるが、どれが正しいか判断できないため、などが考えられる。いずれにせよ、パリの手稿は完成稿ではないため、ペンディングになった箇所があるのも不思議ではない。

II.　抹消・修正

チマルパインは抹消した後で修正を加えていることが多いが、修正の仕方によって、いつ修正したのかが分かる。書いた直後に間違いに気づいた場合、すぐに抹消線を入れ、そのすぐ後ろに修正を施している。それに対し、後で読み返した際に気づいた場合は、線を引くなどして間違った箇所を抹消した後、行間や左右上下の余白を利用して書き加えている。また、修正にはもう 1 つの方法がある。上書き修正である。算用数字だけでなく[図版 b および b']、強引に曜日を上書きした例もある[8]。

II-1　人名、日付

空白のまま残したのは人名や日付に関するケースが多かったが、修正箇所もやはり人名や日付に関するものが少なくない。副王の名前（don Alvaro ~~Enrriquez~~ Manrrique de Çunica）(9)、修道士の名前（~~Diego~~ Hernando Duran）(10)など、間違えた理由が何となく透けて見えるような例もある。もちろん単なる勘違いもある。例えば、かつてのアステカ王の血を引くイサベル・デ・モテクソマと、カタリナ・デ・サンミゲル・デ・モテクソマをそれぞれ 2 度ずつ取り違えている(11)。さらに、間違いに気づいていない例もある(12)。

II-2　転写の証しとなる抹消

一方、間違い方のパターンがよく似た不思議な抹消例が複数ある。一見すると単なる抹消なのだが、実はその直後、または 1、2 行後ろに、抹消されたのと同じ語句や文が出てくるケースである。例えば、1592 年 1 月 21 日（p.4）には、"…niman occeppa~~ompa~~ ompa…"「すぐに再び~~あちらで~~あちらで」、1611 年 1 月 12 日（p.137）には、"… Patrona yn teopan S. Anton ~~ycnocihutzintli~~ ycnocihutzintli yn illamatlacatl…"「サンアントン教会の後援者で、~~未亡人~~未亡人の老婦人」と、それぞれ同じ語をすぐに繰り返している(13)。文章を考えながら書いていればこのようなミスを犯すとは思えず、何かを引き写しているからこそ起こったうっかりミスと言える。

それだけではない。転写していたことを示す、もっと明らかな証拠がある。それは支倉常長の慶長遣欧使節(14)についての記事である。この一行は 1614 年 3 月にメキシコ市に到着したが、チマルパインはそれを 1 年前の 1613 年の四旬節の出来事として書いてしまった。そのため、1613 年の 10 行にわたる記事を線で抹消し、1 年後の四旬節に新たに書き直している。

表 2　1613 年と 1614 年のテクスト比較(15)

1613：*Axcan* miercoles *ynic* 13 **mani metztli Março de** 1613 *años.Quaresma yhcuac* omachiztico *nican Mexico* vmpa tlahtolli hualla yn acapolco yn quenin ye yc onxiuhtica yc oppa oncan oquiçaco yn Jabon acalli oncan ohualla *Señor Sebastian vizcayno* español, yn nican **Mexico** yah onxiuhtica, *yn omocuepaco.* yhuan no oncan ohualla quihualhuica Yn **teuhctitlan-tli** in *Embajador* yn ititlan yn quihualtitlani huey tlatohuani Emperador Jabon, macuil-pohualli yn imacehual Jabonti quinhual-	1614：*Axcan* lunes *cuaresma ynic*17. *mani Metztli Março de* 1614 *años*. quin *ihcuac* ypan in *nican Mexico* ahcico ocallaquico yn omoteneuh *Señor Sebastian Vizcayno* vezino *Mexico*. yn onhuiya Japon yn oquicahuato omoteneuhque ocentlamantin achtopa nican Mexico onhuitza Japon tlaca. yexiuhtica *yn omocuepaco* Señor Sebastian vizcayno. ynic oquinhualhuicac oc ceppa cequintin Japon tlaca Yhuan ce **teuctitlantli** ye omoteneuh *Embaxador* huey tlacatl. yn hualmotitlani

huica auh yn uinnahuatlahtalhuitihuitz ce S. Fran^{co} tottatzin descalço	
1613 年 3 月 13 日、水曜日、四旬節　アカプルコからメシコに届いた知らせで、2 年経て、再び日本から船が着いたことが分かった。その船にはスペイン人のセバスティアン・ビスカイーノ氏もいる。彼は 2 年前にメシコを出たが、今回は日本の皇帝が派遣した大使を連れてきた。大使には日本人の家臣が 100 人も伴をしており、跣足フランシスコ会の神父もいる。	1614 年 3 月 17 日、月曜日、四旬節　前述のセバスティアン・ビスカイーノ氏がメシコに到着し、入城した。彼はメシコ市住民で、前に来ていた日本人の伴をして日本に行っていた。それから 3 年してセバスティアン・ビスカイーノ氏は再び日本人を連れ、またあちらの君主から派遣された大使とともに戻ってきた。

抹消された文と書き改められた文とを比較してみよう。表 2 では両方のテクストに現われる語句を太字の斜字体で示した。また、1614 年 3 月 17 日には出てこないが、その直前の 14 年 3 月 4 日のテクストには出ている語句には下線を施した。13 年 3 月 13 日の記事は船がアカプルコに着いたことを知らせる第一報なのに対し、14 年 3 月 17 日の記事は支倉使節本隊のメキシコ市到着の報である。そのため内容に少し違いがあるが、その前の 3 月 4 日には先遣隊が首都に到着したことを報じた記事があり、日本人の様子をもの珍しそうに詳述している。「日本の皇帝 huey tlahtohuani emperador Japon（ただし、天皇ではなく、徳川将軍を指す)」、「100 人の家臣 macuilpohualli yn imacehualhuan jabunti」、「1 人の跣足フランシスコ会修道士 ce tottatzin descalço teopixqui S Franco」などの語句は 4 日の方に出ている。1613 年の記事の内容はほぼ全て 14 年の記事に盛り込まれており、両者に共通した語句が相当数あることからも、これらの記事が同一のテクストを下敷きにして書かれたことは明らかであろう。時期を 1 年も間違ったのは、何かを写していたからこそ犯したミスだと断定してよかろう。

II-3　綴りの変化と修正

先の支倉隊の記事でもう 1 つ指摘しておきたい点がある。「日本」という単語の綴りである。1613 年には Jabon（「日本人」は jabonti）と綴られているのに対し、1614 年には Japon（「日本人」は Japon tlaca「日本の人びと」）となっている。この語の表記はテナ版と英語版では若干食い違いがあるものの、概ね同じである。ところが、BnF 版を見ると実はさらに微妙な違いがある。そこで、1597 年初出時から 1615 年 2 月までに出てくる BnF の「日本」の綴りを比べると、時期によって 5 通りの綴りがあることが分かる。

表 3 を見れば、多少入り乱れている部分もあるものの、綴りは次のように変化している。Xabon（1597 年）⇒ Jabun（1610 年 11 月）⇒ Jabon（1610 年 12 月）⇒ JaPon（1614 年 3 月）⇒ Japon（1614 年 10 月）。4 つ目を小文字の p ではなく大文字の P を使って JaPon と表記したのは、もともと Jabun または Jabon という綴りだったものを、

bの縦棒をそのまま下に伸ばしてpに見えるよう上書き修正した箇所である[図版c]。ただ、修正は徹底されず、元の綴りのまま残された箇所もある。書き直しや併存期間があることを考慮に入れれば、綴りの変化はXabon（1597年）⇒ Jabun／Jabon（1610年）⇒ Japon（1614年）と3段階、4通りになろう。

なぜこのように綴りが変化したのであろうか。参考にした資料により、綴りに食い違いがあった、あるいは文字を見たのではなく、耳で聞いた珍しい単語であったため綴りに迷ったなどの理由が考えられる。しかし、同時代のほかの人たちの綴りと比較しないと、チマルパイン独自の事例なのか、時代の流れなのか判断しかねる。ただ、ナワトル語には[b]音や[u]音がないため、p／b、o／uの取り違えはナワトル語話者ならではの癖と言えよう。また、xとjの差はむしろこの時期のスペイン語の問題かもしれない。残念ながら、この問題については別の機会に譲りたい(16)。

果たして、この綴りの変化から何が言えるであろうか。1つは、b→pと上書きした時期が、Japonの綴りが見られるようになる1614年10月記事の執筆後ということである。また、遡っての修正は同年3月止まりで、それ以前のものは修正がないことが確認できる。

表3　チマルパイン『日記』に見る「日本」の綴り(17)

	日付け	綴り		日付け	綴り		日付け	綴り
1	1597.12.7.	Xabon	17	id.	Jabon	33	id.	JaPonti
2		xabon	18		Jabon	34		JaPonti
3		Xabon	19		Jabon	35		JaPon
4	1598.12.6.	Xabon	20		Jabon	36		JaPon
5	1610.11.15.	Jabun	21	1611.3.7.	Jabon	37		JaPon
6		Jabun	22		Jabon	38	1614.3.24.	JaPon
7		Jabun	23	1613.3.13.	Jabon	39		JaPon
8		Jabun	24		Jabon	40		JaPon
9		Jabun	25		Jabonti	41		JaPom
10		Jabun	26	1614.3.4.	JaPon	42		Jabun
11	1610.12.16.	Jabon	27		JaPon	43	1614.10.14.	Jabun
12		Jabon	28		JaPon	44		Japon
13		Jabon	29		Jabunti	45		Japon
14		Jabon	30		JaPonti	46	1614.10.23.	Japon
15		Jabon	31		JaPon	47	1615.2.7.	Japon
16		Jabon	32		Jabun	48		japon

つまり、「日本」の綴りに関するかぎり、後ろの方から遡って見直したことになる。13 年 3 月の誤報は抹消したから今さら修正はしなかったということであろうか。

チマルパイン研究の第一人者シュローダーは、彼の特定の語の綴りの変化に注目し、全著作をとおして綴りの変化を見ることで、各書の執筆年をある程度、確立できるという考えを提示している。さらに、特に『日記』は様ざまな理由からそれぞれの日付に近い時期に書かれていると思われるため、指標になるとも言う(18)。非常に魅力的な説であるが、はたしてそううまく行くのか、本稿で検討しているような修正や加筆があることを考えると筆者は全面的に賛成することはできない。

II-4　異質な抹消部分

最後に、以上の抹消部とは性質の異なる例が 1 つある。1599 年 9 月 9 日にはメキシコ市の行政官ヘロニモ・ロペスに関する記事があり、その少し下の余白部に、一旦加筆されていながら抹消された文章がある。

ce cequintin quimachiyotia ypan in y hualla don Geronimo lopez gou^{or}. mexico ypan meztli octubre de 1600 a^{o}s. amo nelli y ca ye tlapic neltitica ynic hualla mexico(19)

> 他の記録によると、メシコ行政官ドン・ヘロニモ・ロペスは 1600 年 10 月に（メシコに）来たことになっているが、それは正しくない。何かの間違いである。(この時に）メシコに来たことは確かである。

この記事の内容に異論もあることは承知しているが、自分が挙げた見解は間違っていないと主張したものである。先にこの部分が異質だと言ったのは、これがまるで他の人の文章の余白に書き込んだかのようなコメントになっているためである。後で見るように、ほとんどの加筆部分は付加的情報で、記事の内容を補い、あるいは書き忘れたことを加えたもので、著者の立場で行われているが、ここだけ第三者的に読者の立場でコメントしている。そのことに気づいて、後から抹消したのではなかろうか。

III. 加筆

チマルパインは『歴史報告書』など他の作品でも、また別の人の作品を転写したものでも、しばしばテクストに介入し、加筆（ときには修正）を施している。それは『日記』でも同じことで、実に多数の、しかも場合によっては長文の加筆を行なっている。抹消後の修正と書き込みについては前項で扱ったので、ここでは単純な加筆のみを扱う。なお、BnF 手稿にはチマルパイン以外の人による書き込みもあるが、それらは考察の対象外とする。加筆箇所は非常に数が多いため、本稿ではその中でも比較的長く、『日記』の執筆プロセスに関わると思われるものだけに限り、いくつかの特徴を抽出する。

III-1　転写の証しとなる加筆？

英語版の編訳者らは、チマルパインが何かを写している証拠となる加筆として、1596年12月8日にメキシコ市で行われたアウト・デ・フェ auto de fe に関する記事への書き込みを挙げている。アウト・デ・フェとは、町の中心の大広場に異端審問所を仮設し、公衆の面前で判決を言い渡し、有罪宣告を受けた人たちを火刑に処する芝居がかったカトリックの宗教儀式で、メキシコでも1574年から、規模は様ざまだが何度か行われた。

チマルパインは“… yquac quintlatique Judiosme tlateotocanime macuiltin, señorasme nahuintin castilteca yc ix. tlacatl”「…偶像崇拝のユダヤ教徒の男性5人とスペイン人女性4人、計9人が火刑に処された。」という本文の後、少し小さな字でこう加筆している。

> Auh yn tlachichihualtin collotin matlactin. ix castilteca. yc 10tli señora, yc once quauhtanatli tentia oncan ce yyomiyo yc centecpantli tlatlaq

次の段落はr(20)という記号が行頭に来て、こう書き出している（下線は筆者）。

> r Auh colotin tlachichihualtin matlactin chiuhcnahui castilteca ce señora. yc matlactli yc once quauhtanaco tentia yyomiyo. yc centecpantli tlatlaque

この2文が酷似していることは明らかだが、これも「うっかりミス」であろうか。

この部分の英語訳とスペイン語訳を比べると解釈に大きな違いがある。英語訳は「10人分、男9人と10人目のスペイン人女性の肖像を焼いた。11人目は遺骨で木の箱に入っていた」とし、スペイン語訳は「19人のスペイン人男性と1人のスペイン人女性の肖像が焼かれた。彼らの骨は1つの木の箱に入っていた」とする。この後の「合計20人が焼かれた」という部分では両者の訳に違いはない。そして英語版、テナ版とも、それぞれの加筆部の訳と本文の訳に差をつけていない(21)。

本文と加筆部の主な違いは、上文中の下線部で本文“matlactin chiuhcnahui castilteca”と加筆部“matlactin. ix castilteca”の“matlactin”「10人」と“chiuhcnahui”／“ix”「9人」を分けて読むか、繋げて読み「19人」とするかにある。この数字表現はどちらとも読める(22)ため、チマルパイン自身も誤読を避ける表現に改めたのではないか。加筆の際に“chiuhcnahui”とせず“ix”とローマ数字にしたのは、間を分けよという意味と考えたい。次の“ce señora”「1人の女性」を序数にして“yc 10tli señora”に変え、「10人目の女性」としたのも同じである。

先の段落は最後が“Auh y mochintin teyttitiloq ynic mocenpohua. in teyttitiloq. 69. tlacatl.”「全て合わせて69人がさらし者になった」となっている。この時の異端審問記録を調べたトリビオ・メディーナによると、ユダヤ教徒として火刑になったのはルイス・デ・カルバハルの一族9人（男4人、女5人）で、他に有罪判決を受けた故人（男2人）が遺骨と肖像を身代わりとして焼かれ、所在不明で肖像を焼かれた8人（うち女性が1人）と

軽微な処罰ですんだ49人がいた。総計68人になる(23)。チマルパインのあげる数字と微妙な差があるが、目撃証言と公式文書記録の誤差としては許容範囲内であろう。

III-2　サンアントニオ・アバー教会についての記述

チマルパインは、1595年以来、自分の生活拠点としてきたサンアントニオ・アバー教会とその関係者に関する情報も書き加えている。加筆の数は決して多くないが、『日記』本文での言及と比べてみると、面白いことが分かる。

a)　『日記』本文での言及

①　1591年7月21日：同教会で初の聖体行列が、司祭ホセ・メンデスと同教会の後援者ディエゴ・デ・ムニョンの要請により、実施された（p.3）。

②　1593年10月5日：チマルパインが同教会で仕え始めた（p.9）。

③　1604年11月29日：同教会周辺で堤防建設工事が始まった（p.39）。

④　1609年8月1日：同教会の後援者の息子、アグスティン・デル・エスピリトゥ・サントがアントニウス会に入会した（p.120）。

⑤　1610年9月18日：アグスティン師が司祭に叙階され、ミサをあげることも可能になった。同時に、ドミニコ会士トマス・デ・リベラ師(24)も使徒書簡集を読む職（副助祭）に叙階された。この式はサントドミンゴ教会において、大司教ガルシア・ゲラの主宰で行われた（p.129）。

⑥　1610年11月14日：アグスティン師が初ミサをあげた。イエズス会サングレゴリオ学院院長のフワン・デ・トバール(25)らが後見人を務めた（p.131）。

⑦　1611年1月12日：同教会の後援者、故ムニョン氏の未亡人で、アグスティン師の母、レオノール・マリン女史が急逝し、アグスティン師が後援者となり、教会運営に携わり、本国アントニウス会の応援に期待を寄せた（p.137）。

⑧　1613年5月31日：先住民女性マリアの十字架事件の顛末（pp.219～222）：サンアントニオ・アバー教会近くの住民が十字架建立を計画したが、マリアが反対し、裁判沙汰になりかけた。アグスティン師が当局と掛け合い、十字架建立の許可が下り、数日後にマリアは病死した（神罰と言わんばかり）。

⑨　1613年5月初め：もう1つの十字架騒動（pp.222～224）：⑧の半月前に先述の十字架建立予定地の所有権をスペイン人夫婦が主張し、裁判になるが、訴えた日のうちに妻は体調を崩し、3日後に死去した（これも神罰さながら）。

⑩　1613年9月4日：同教会の向かいで湖の埋め立て、家や店の建設工事が進行し、今後も湖が姿を変えると予見する（pp.225～227）。

⑪　1614年4月29日：フェリペ3世がペルーにアントニウス会を派遣し、病院

建設との報が届く。アントニウス会の歴史を紹介する（pp.248〜251）。

⑫　1614 年 11 月 15 日：アグスティン師とアントニオ・ロケ博士がスペインのアントニウス会へ書簡を認めた（p.263）。

⑬　1615 年 5 月 28 日：教会周辺の湖が干上がった（p.276）。⑩の工事も影響か。

⑭　1615 年 6 月 1 日：教会周辺で水道橋の新設工事が始まる（p.276）。

b)　『日記』の加筆記事

㋐　1595 年 11 月 30 日：アグスティン・デル・エスピリトゥ・サント神父がアントニウス会の僧服を着た。メキシコ大司教区の聖堂参事会員エルナンド・オルティス・デ・イノホサ博士が同会の僧服を羽織らせた（p.16 右余白）。

㋑　1610 年 3 月 28 日：アグスティン師が福音書を読む職（助祭）に、同時にドン・ディエゴ・ソテロ(26)がミサをあげる職（司祭）に叙階された（p.125）。

㋒　1614 年 11 月 15 日：アグスティン師とロケ博士が、本国のアントニウス会へ宛てた書簡で「同会の修道士がどこにいるのか、修道士の派遣は可能か」(27)打診した（p.263 行間から左余白）。

㋓　1615年5月28日：先の2人がアントニウス会へ2通目の書簡を認めた（p.276 行間から左余白）。内容は前便㋒と同じ。

さて、a)と b)を比べてみると、奇妙な点に気がつく。加筆部の㋐で、教会後援者の息子、アグスティン・デル・エスピリトゥ・サントが 1595 年にアントニウス会の僧服を着た（つまり入会した）とあるのに、本文の④（1609 年 8 月 1 日）にも彼が入会した話が出ている。同一人物が同じ修道会におよそ 15 年後に、再び入会することは普通、考えられない。職階が上がり高位の職に就いたのであれば、説明しているはずである。

1609 年の本文④によると、アグスティン師はある裁判の当事者で、係争相手はプエブラ司教のアロンソ・デ・モタ・イ・エスコバールと同司教区法務担当（プロビソール）のメルチョール・マルケスであった(28)。何が問題だったのか。チマルパインの歯切れはよくないが、2 度の「入会」、この年 8 月 1 日までに裁判が終わり、件の司教からも許可を得たこと、この裁判にアグスティン師が「苦しんできた yn itoliniloca omochiuh」こと、「今や晴れて ye mellahuac」アントニウス会の僧服を纏えるという表現から判断すると、アグスティン師のアントニウス会入会資格をプエブラ司教が問題視し、裁判にまで発展したということであろう。この訴訟がいつ、どういう形で始まったのかは不明だが、裁判による遅れを取り戻そうとするかのように、アグスティン師は 1609 年の入会から半年後に助祭に、さらに半年後には司祭に叙階され、初ミサもあげるなど異例の昇進を果たす。

アントニウス会は本来、「聖アントニオの火」と呼ばれた麦角中毒の患者の世話をする

ために設立された病院修道会である(29)。しかし、メキシコのサンアントニオ・アバー教会はアントニウス会が設立したものではない。1530 年、私費で庵を建設したいと希望するアロンソ・サンチェスというスペイン人の求めに応じ、メキシコ市市会が土地を与えたのを淵源とする(30)。当時メキシコではヨーロッパの作物はまだほとんど栽培されておらず、麦角中毒の心配も少なかったはずで、アロンソ・サンチェスがなぜサンアントンの庵を建設しようとしたのかは分からない。

建設後もサンアントニオ・アバーの庵の存続は綱渡り的な状況にあった。乱立する庵に教会当局も頭を痛めており、1585 年の第 3 回メキシコ地方公会議では、そのような庵をできる限り取り潰す方針が打ち出された。サンアントニオ・アバーは、司教に上げられた 1570 年の報告で、「古い庵だが、収入がなく、布施に頼っている」という評価を下されている。その苦境から救ったのが、同庵の後援者となったディエゴ・デ・ムニョンとメキシコ大司教区の中枢にいたサンチョ・サンチェス・デ・ムニョンであった(31)。その援助の甲斐あって、1591 年には庵から教会へと格上げされた（①）が、後援者の死後もその息子が運営に携わる（④）など、私的な性格を残していた。私的な庵であるのにアントニウス会の僧服を着るという点を、プエブラ司教は問題と考えたのであろう。

チマルパインはサンアントニオ・アバー教会周辺での出来事はよく伝えているが、教会そのものの活動については全く触れていない。病院として機能していたのかも怪しい。彼や関係者が病人の看護をしたというような話はどこにも見当たらない(32)。その一方、チマルパインの字は美しく、彼が写本作成を生業とする写字生だったと考える研究者もいるほどである。確たる経済基盤がない小さな教会の不安な先行きを考えれば、本国のアントニウス会に書簡を送り、修道士の派遣を要請するのが最善の手と思えたのであろう。実際、1614 年秋、15 年春と半年も空けず立て続けに、本国のアントニウス会に書簡を送ったのは、不安の大きさと焦りを表わしていると言えよう。

本国のアントニウス会への支援要請の書簡がどうなったのかは分からない。実際にアントニウス会士がメキシコに来たのは 1628 年のことである。そしてチマルパインが抱えていた不安は、それよりも前に的中してしまう。1624 年 6 月 22 日にアグスティン・デ・エスピリトゥ・サント師が亡くなると、アウグスティヌス会が 10 人余りの修道士を送り込み、サンアントニオ・アバー教会を乗っ取ってしまうのである(33)。この不法占拠を副王は認めず、教会の鍵の引き渡しを求めたが、応じなかったため、7 月 12 日にアウグスティヌス会士を強制排除し、教会を王室の所有物とした。アウグスティヌス会が入り込んだ段階でチマルパインも追い出されたのであろうか。少なくとも以前と同じような執筆活動がしづらくなったであろうことは想像に難くない(34)。

III-3　2 人の「生ける聖人」

加筆部分のもう 1 つの特徴は、「生ける聖人」として、ヌエバ・エスパーニャ社会で尊敬を集めた 2 人に関する記事を挿入している点である。チマルパインは 1600 年 2 月 20 日と 5 月 3 日の記事の間に、行間や右余白・下余白を使って、フランシスコ会士セバスティアン・デ・アパリシオ師の死去（2 月 25 日）について書き加えている。

//axcan ypan viernes ye yohua ynic 25. mani metztli de hebrero de 1600. a^{o}s. ypan ylhuitzin S. Mathias Apostol omomiquilli … fr. Sebastian de Aparicio. teopixqui S Fran^{co} …ypan altepemaytl ytocayocan Gadiña. yn ipan tlahtocayotl Galicia. yn ipan yeyantli de viedma. yntlahuillanalpan yntech pohui yn tlahtoq condes de Monterrey. yn ittatzin ytoca catca Juan de Aparicio. auh yn inantzin ytoca Teresa del Prado tlalchiuhq.(35)

> 1600 年 2 月 25 日、金曜日、使徒聖マティアスの祝日、夜になって…フランシスコ会士セバスティアン・デ・アパリシオ師が亡くなった。…ガリシア王国ビエドマ地方のグディーニャ村の生まれで、ここはモンテレイ伯の所領であった。彼の父フワン・デ・アパリシオ、母テレサ・デル・プラドは農夫だった。

今ではこの修道士の名前を知る人も少ないが、ここまで詳しい個人情報をチマルパインが提供しているのは、よほど親しかったからかと思えるが、アパリシオ師の活動拠点はメキシコ市の東南 120 キロメートルにあるプエブラであり、知己であったとは思えない。また、チマルパインはアパリシオ師の人物像や実績には全く触れていない。

実はアパリシオ師の帰天直後、同じ修道会のフワン・デ・トルケマーダ師がその伝記（1602 年）を上梓し、17 世紀末にはアロンソ・デ・ベタンクール師が『フランシスコ会聖人暦 *Menologio Franciscano*』（1700 年）でアパリシオ師に 7 ページ余りも割いている(36)。それによると、アパリシオ師は 1502 年にスペイン北西部ガリシア地方の農家に生まれ、31 年にメキシコへ渡り、身を立てた。数十年かけて成した財を売り払い、ある貧しい修道院に寄付すると、自らは 72 歳でフランシスコ会に入った。若い頃から悪魔の誘惑と闘い、修道士になってからも彼が起こした奇跡が何度も多くの人に目撃された。「生ける聖人」として知られ、すぐに伝記が用意されたのも、列福運動の一環であろう。上で引用したチマルパインの加筆部は、トルケマーダや他の『アパリシオ伝』に依拠したベタンクールの記事と重なる部分である。チマルパインもそのような伝記から情報を得たと思われ、彼の生前に出版されたトルケマーダ作品を使った可能性が高い。

もう 1 人の「生ける聖人」が隠修士グレゴリオ・ロペスである。彼はヌエバ・エスパーニャへ来ると各地を転々としながら独居生活を送り、祈りと苦行と瞑想に多くの時間を費やした。不思議な魅力で多くの人を引き寄せ、副王から大司教まで相談のため彼を訪れる

人が後を絶たなかったという。異端の疑いも掛けられたが、その調査に来たフランシスコ・ロサは彼に魅了され、司祭の職をなげうってグレゴリオ・ロペスに師事した。そのロサによる伝記『神の僕グレゴリオ・ロペスのヌエバ・エスパーニャでの生涯 *La vida que Hizo el Siervo de Dios Gregorio López en algunos lugares de esta Nueva España*』(以下、『伝記』と略す) は 1613 年にメキシコで出版された後、本国でも版を重ね、フランス語、ドイツ語、英語に翻訳され、列福運動も始まった(37)。

チマルパインはグレゴリオ・ロペスについて『第七報告書』でも 2 度、1542 年 7 月 4 日にマドリードで誕生したこと、89 年 5 月 22 日にメキシコ市郊外のサンタフェの荒野へ移り住んだことに言及している(38)。そして『日記』では fol. 18v の左余白に次のような書き込みがある。他の加筆部と違い、スペイン語である (以下、下線は筆者)。

Ⓐ Fue Gregorio Lopez a aquella soledad de Sancta fee a 22 de mayo de 1589 segundo día de pascua de espiritu santo donde prosiguio sus exercisios de oración y contemplacion hasta el día de su muerte(39).

グレゴリオ・ロペスは 1589 年 5 月 22 日、サンタフェで隠遁生活に入った。聖霊の祝日 (聖霊降誕祭) の 2 日目で、彼はそこで祈りと瞑想の修行を亡くなる日まで続けた。

また、『日記』の 1596 年 7 月 20 日の記事の後、上余白から右余白にかけてグレゴリオ・ロペスが亡くなった話が加筆されている。やはりスペイン語である。

Ⓑ El sancto hermitaño gregorio lopez murio sabado a midiodia: que se contaron veyte de Julio de este año de 1596. dia en que la sagrada Religion de los Padres carmelitas celebra la fiesta del Sancto Helias, Primer Padre y fundador de su vida solitaria. la cual gregº. lopez tan perfectamente auia seguido. viuio cinquenta y quatro años. y los treynta y tres dellos en soledad depositose el cuerpo en la yglesia de Sancta fee. junto al Altar mayor, al lado del Euagelio[図版 d](40).

聖人のような隠修士グレゴリオ・ロペスが土曜日の正午に亡くなった。この 1596 年という年の 7 月 20 日のことで、カルメル会神父の修道会が、独居生活の最初の父で会の創設者である聖エリヤを記念する祝日であった。グレゴリオ・ロペスは完璧な隠遁生活を送ってきた。54 年の生涯のうち、33 年間は独居生活をした。遺体はサンタフェ教会の主祭壇の近く、福音書の側 (入り口から見て左側) に埋葬された。

『日記』はほぼ全編ナワトル語で書かれており、加筆した箇所もそうなのだが、なぜグレゴリオ・ロペスに関する加筆部分だけスペイン語なのであろうか。いや正確に言うと、スペイン語での加筆はもう 1 カ所ある。1612 年の最後、12 月 8 日の記事の後に加筆記事が 2 つあり、左余白の加筆はスペイン語である。ワステペック (現モレロス州オアステペック) にベルナルディーノ・アルバレス(41)という人物が建てたサンタクルス病院に関する

ものである。

Ⓒ　hernos. de huastepec y Bernardino Aluarez, fundador de los hospitaleros hernos. conualecientes de Mexico. y de otros muchos que estan repartidos por la nueua españa que merecio felicissimo successos de prosperidad para el bien remedio y salud de muchos[図版 e] (42)

ワステペックの兄弟会とメシコの看護兄弟会およびヌエバ・エスパーニャ各地にある他の多くの（看護兄弟会の）創設者であるベルナルディーノ・アルバレスは、多くの人びとの善、救済、健康に尽くし、万事首尾よく運んだ。

『日記』に加筆箇所は数あるものの、スペイン語で書かれたのはこの 3 ヶ所だけである。先に挙げた 2 ヶ所はグレゴリオ・ロペスに関するものであったが、最後の例は彼の名前も現われず、関わりがないように見える。ところが実はこの 3 つ目もグレゴリオ・ロペスというキーワードで繋がる。ロサ神父によると、メキシコ市郊外のサンタフェで隠遁生活を始める前に、グレゴリオ・ロペスはワステペックの病院で治療を受け、入院中に、病院創設者のベルナルディーノ・アルバレスとも親交を深め、『薬草宝典 *Tesoro de medicinas*』を執筆し贈呈しているのである(43)。

スペイン語で加筆された 3 つの文はスペイン語の文書が情報源だと思われる。いずれもグレゴリオ・ロペスに関わるものであることから、チマルパインの生前に出版されたフランシスコ・ロサ著の『伝記』である確度が高い。同書の初版本は入手困難だが、ロペスの 2 つの著作（『薬草宝典』と『黙示録注解 *La explicación del Apocalypsi*』）を合わせたスペイン語の第 4 版（1727 年）をスペイン国立図書館がデジタル化しており、オンラインで利用できる。『日記』の加筆部と、ロサの『伝記』を比べれば、関係性は明らかである。上のⒶ（『日記』fol.18v、1589 年 5 月 22 日の翻刻）の図版はないが、『伝記』（図版 f）に対応している。またⒷ（『日記』p.18[図版 d]、1596 年 7 月 20 日加筆部の翻刻）は『伝記』（図版 d'）に、Ⓒ（『日記』p.198[図版 e]1612 年 12 月加筆部の翻刻）は『伝記』（図版 e'）に対応している。とくに筆者が下線を施した部分はほぼ一言一句同じである(44)。

ロサの『伝記』を読んだチマルパインが、書き加えるべき文をそのままスペイン語で書き写し、後でナワトル語に訳すつもりだったのであろう。他方、『日記』との関わりが強い（1591 年まで）『第七報告書』のグレゴリオ・ロペスの記事はナワトル語で書かれており、こちらもロサの『伝記』に依拠した可能性がある。チマルパインの作品群の執筆年を考えるうえで、この点も考慮に入れる必要がある(45)。

結論にかえて

メキシコの古文書の多くが、主に独立後の混乱期（19 世紀）に欧米列強の手に渡った。貴重な絵文書・古文書はそれらの国々の図書館・博物館や古文書館に厳重に保管され、一部の研究者を除いて見ることは容易でなかったが、今やデジタル化された古文書を誰でも家にいながら閲覧できるようになった。パリのチマルパインの『日記』を分析して、この史料の執筆プロセスについて分かったこともあれば、新たな謎もある。

空白部や抹消部、加筆部が少なからずあることから、『日記』として我々が目にしている文書が完成稿でないことがまずひとつである。さらにそのような加工がなく、整然と書かれたページも多いことから、完成稿に近い原稿であったとも言えよう。また、同じ語句をうっかり繰り返し書いて抹消した部分や、書くべき年を間違った支倉使節の記事の存在から、何か（下書き原稿や他の人の文書）を写して書いたこと、少なくともそういう部分があることが確認できる。

本稿では「日本」という語の綴りが変化していることを指摘した。Jabon（または Jabun）という綴りの b の縦棒を下に伸ばし p に見せようとした上書き修正は、Japon という綴りに落ち着いた後で施されたことになる。前々号で筆者はチマルパインの「クリオーリョ」という語の特徴的な使い方や 1614 年以降は綴りに変化（criyoyo ⇒ criollo）が見られることを指摘した。Japon への変化と同じ時期である。それが偶然か、何か意味があるのかについては、綴りの変化例をもっと集めないと確かなことは言えない(46)。

綴りの変化がチマルパイン作品の執筆年を推測するバロメータになるかといえば、筆者はまだもろ手を挙げて賛成はできない。『日記』に記された日付は出来事が起こった日付であって、それが書かれた日付ではないからである。後になるほど両者の時間差が少なくなるのは確かだが、どれほど時間が経っているのか、現時点では分からない。そのうえ、本稿で見たような加筆があり、本文執筆後どれだけ時間を経て挿入されたのかも分からない。したがって、Japon という綴りがある箇所は 1614 年 10 月に書かれたのではなく、その記事を書いた時期以後（1614 年 10 月＋α）だとしか言えない。そのことをもう少し明確に示したうえで、議論を進めるべきであろう。

サンアントニオ・アバー教会に関する加筆記事と本文の記事を照合して、アグスティン・デル・エスピリトゥ・サント師がおよそ 15 年の歳月を隔て 2 度、アントニウス会に入ったことになっていることが分かった。そこでチマルパインがあまり語ろうとしない問題が見えてきたように思う。しかし、現段階では状況証拠を重ねた推理であり、教会裁判の記録などを調べる必要がある。

生ける聖人に関して珍しくスペイン語で加筆された箇所については、彼が引用に際して依拠した資料を明らかにできた。フランシスコ・ロサが執筆したグレゴリオ・ロペスの『伝

記』（1613 年）である。したがってこの部分は同書が出版された 1613 年以降に加筆され、本文はそれ以前であると言えよう。ただし、出版前に出回っていた手稿をチマルパインが読んでいなければ、という条件は付けねばなるまい。

注

(1)　拙稿「チマルパインと 1608 年」、『摂大人文科学』第 22 号、pp.1～35、拙稿「チマルパインと「クリオーリョ」」、同第 23 号、pp.1～24、拙稿「チマルパインと「ドン」」、同第 24 号、pp.1～29。チマルパインの人となりや作品の詳細についてはこれらを参照されたい。

(2)　スペイン語訳は Rafael Tena, *Diario*（México, 2001）、英語訳は James Lockhart, Susan Schroeder and Doris Namala、*Annals of His Time*（Stanford University Press, 2006）。どちらもナワトル語テクストを翻刻しているが、微妙な違いは少なくない。また、テナ版は今日の読者に読みやすいよう、現代風の表記を心がけているのに対し、英語版は原文にできるだけ忠実な表記を採用している。

(3)　BnF の Gallica でチマルパイン関連の古い論文や記事とともに『日記』や『歴史報告書』をオンラインで見ることができる。2009 年にはメキシコの社会人類学高等研究所 CIESAS が BnF の協力を得て、同館所蔵のメキシコ関係の古文書類を DVD に収めた“*Amoxcalli　La Casa de los Libros*”を出し、コディセを含む数十件の古文書が簡単に読めるようになっていた。ただ、チマルパインのものは含まれていない。以下、チマルパイン作品からの引用は、断りを付けないかぎり BnF 版のページ（テナ版、英語版の翻刻テクストにも示されている）を指す。このページ番号はチマルパインが付したものではない。彼は偶数ページの最後の語句を次の奇数ページで繰り返したり、次ページの最初の語を書く（reclamo と呼ばれる）などしているが、これも BnF 版を見ないと分からない。

(4)　拙稿「チマルパインと 1608 年」、p.17 以下を参照されたい。

(5)　例えば、『日記』、p.160（1612 年 1 月 21 日）には、前後のインクとは明らかに濃淡が違う書き込みがあり、しかも加筆文がブランク部分をはみ出し、行間に及んでいる[図版 a]。

(6)　『日記』、p.1（1590 年 1 月 25 日）、木曜日としたものの、すぐ上に「ひょっとしたら金曜日か anoço viernes」と挿入したうえで抹消している。つまり、見直した際に曜日が違っている可能性をメモ書き風に記したものの、後で確認して抹消したと思われる。

(7)　本稿 II-3　綴りの変化と修正を見よ。

(8)　『日記』、p.107（「史的回顧」で歴代副王を紹介）で、「今年 1609 年まで」の“9”を“8”に上書き修正[図版 b、b']。『日記』、p.203（1613 年 3 月 5 日）で“miercoles”「水曜日」を“martes”「火曜日」とした例。曜日の間違いは 1589 年 7 月 9 日をはじめ、1612 年 11 月 24 日まで、テナが指摘しているだけでも 9 カ所ある。また月を間違えた珍しい例（1597 年 4 月 20 日を 3 月に）もある。

(9)　『日記』、p.1（1590 年 1 月 25 日）。数代前の副王 Martín Enríquez に引きずられたもの。Çunica も本来なら Zúñiga としなくてはならないが、ナワトル語には[g]音がないため[c]としている。

(10)『日記』、p.139（1611 年 1 月 29 日）。クリオーリョとして初めてフランシスコ会管区長になったエルナンド・ドゥランを、ドミニコ会士で歴史家でもあるディエゴ・ドゥラン（チマルパインはアクセント符号を付けていない）とした。ディエゴ・ドゥランについてチマルパインは他の書でも言及していないが、先住民の歴史に関心のある先達として注目していたことをうかがわせる。

(11)『日記』、pp.273～275（1615 年 5 月 19 日）。

(12)　巡察官として来墨した Diego Landeras y Velasco は 3 度とも、Velasco ではなく Velazquez

のままになっている。『日記』、p.48（1606 年 10 月 4 日）、同、p.119（1609 年 5 月 3 日）。

(13)　ほかに 1594 年 3 月 19 日(p.11)、同年 3 月 24 日(p.12)にも類例がある。なお、英語版は、1613 年 9 月に … ayemo quichihua missa yn ihcuac yn …「その時はまだミサをあげていなかった」という文が 2 行下で繰り返されているのも同類とするが、これは単なる人違いであろう。

(14)　この船にはセバスティアン・ビスカイーノと日本で宣教活動をしていたフランシスコ会のルイス・ソテロらも乗っていた。これより以前、1609 年にロドリゴ・デ・ビベロがマニラでの任務を終え、アカプルコに戻る途中、嵐に巻き込まれ、現千葉県御宿の浜に漂着した。翌年、幕府が仕立てた船で帰墨した際に、数名の日本人が同乗していた。11 年、その徳川使節の帰国に際し、答礼のため同行したビスカイーノらが、14 年、伊達藩の遣欧使節とともにメキシコに帰った。

(15)　1613 年の記事は『日記』、pp.203～4、1614 年の記事は同 pp.243～4。なお、『日記』からの引用は英語版の翻刻に従った。以下も、特に断りがないかぎり、同じである。

(16)　スペイン語の子音の変化は中世に始まり、16 世紀後半から 17 世紀初頭に一般化しつつあったが、地域差も大きかった（R・ラペサ『スペイン語の歴史』、pp.396～）。例えば、「ザビエル」は Xavier と綴られ、彼の出身地ナバラ地方では「シャビエル」と発音されていたが、後にカスティーリャでは Javier「ハビエル」に移行する。また、刊本は現代風の綴りに直しているものが多いため、当時の一般的な「日本」の綴りはファクシミリ版で確認する必要がある。手元にあったファクシミリ版ではフワン・デ・トルケマーダの『インディアス王国論 *Monarquía indiana*』（1615 年）では Japon、Japones（アクセント符号なし）となっている（lib.V、cap.XXIII～）。ヘロニモ・デ・メンディエタの『インディアス教会史 *Historia eclesiástica indiana*』では日本への言及がなく、エンリコ・マルティネスの『ヌエバ・エスパーニャ宇宙誌・博物誌 *Reportorio de los tiempos e historia natural de esta Nueva España*』（1606 年）には 3 度ほど Japón として出てくる（本能寺の変など）が、20 世紀の編者が綴りに手を加えている。

(17)　1597、98 年は長崎で 26 人（チマルパインによると、6 人の跣足フランシスコ会士と日本人信者）が殉教した件、1610、11 年はロドリゴ・デ・ビベロに同行した使節団の件、1613～15 年は支倉を長とする慶長遣欧使節（ただし、13 年は抹消）に関しての記事である。

(18)　Schroeder, Introduction, p.14。“iquac”「その時、～した時」という語は、『日記』では最初はそう綴られたが、1609 年 9 月に“ihquac”と併用され始め、12 年以降は“ihcuac”が主流になるという。

(19)　『日記』、p.24 の左下余白。

(20)　r は新しい段落（あるいは記事）の先頭にチマルパインが付けた記号。図版 d を参照のこと。

(21)　『日記』、p.18。英語訳は英語版 p.59、スペイン語訳はテナ版 p.65。英語訳は 20 人という総数と合わないが、その前にユダヤ教徒として火刑にされた 9 人を加えると 20 人になる。スペイン語訳も、肖像が焼かれた人の数に限れば間違ってはいない。

(22)　ナワトル語の数詞は普通、名詞の前に置かれるが、「12」“matlactli omome”（「10」matlactli と「2」omome の組合せ)」のような複合数字は、そのまま名詞の前においても、10 と 2 を名詞の前後に振り分けることもできる。「12 本の木」は“matlactli cuahuitl omome”とも言える（Michel Launey, *Introducción a la lengua y a la literatura náhuatl*, pp.63-65）。

(23)　José Toribio Medina, *Historia del Tribunal del Santo Oficio de la Inquisición en México*, pp.75～115。T・グリーンによるメキシコ市でのアウト・デ・フェ（1649 年）の描写は興味深い。

(24)　トマス・デ・リベラ師はチマルパインと同郷、チャルコ・アメカメカ出身のドミニコ会士。祖父は同地方トライロトラカン領主、フワン・デ・サンドバル・テクワンシャヤカツィン。原則的に先住民は聖職者にも、修道士にもなれなかったが、フワン・デ・サンドバルはチャルコ地方にドミニコ会を招いた有力者（1525 年以来、40 数年間も領主を務めた）だったから、その血縁者は特別待遇を受けたのであろう。

(25)　フワン・デ・トバール（1541～1626）はメキシコ市生まれのイエズス会士で、ホセ・デ・アコスタ神父が『新大陸自然文化史』（1590 年）を執筆する際、メキシコ関係の資料を提供した。ディエゴ・ドゥラン（注 10 参照）と親戚で、情報をやりとりした。

(26)　ドン・ディエゴ・ソテロはかつてのアステカ王モクテスマの子孫（Zimmermann、*Chimalpahin y la iglesia de San Antonio Abad en México*, pp.20～21）。また、モクテスマ一族について記したチマルパインの小品にも「ドン・ディエゴ・ソテロ・デ・モテウクソマ；この人は聖職者でミチョアカン（地方）の[原文空白]で司祭を務める」とある（“Lineage of the Valderrama de Moteucçomas and the Sotelo de Moteucçomas” in *Codex Chimalpahin 2*、pp.108-9）。

(27)　「どこにいるのか」は反語的に、「早く来てほしい」の意であろう。スペインのアントニウス会の長がフランシスコ・デ・ラ・プレサ・イ・モタで、本部がカストロヘリス Castrojeriz（ブルゴス県）にあることはチマルパインも記している（『日記』、p.248、1614 年 4 月 29 日）。

(28)　モタ・イ・エスコバールはクリオーリョで、1597 年 10 月から 2006 年 5 月までグアダラハラ司教を務め、2007 年 5 月にプエブラ司教に転身した。法務担当の名が挙げられているため、モタ・イ・エスコバール自身が訴訟を起こしたのではなく、プエブラ司教区として訴えたと思われる。

(29)　アントニウス会は 11 世紀末に南フランスで創設された病院修道会で、スペイン、イタリア、ドイツに拡がり、14 世紀には最盛期を迎えたが、1418 年以降、深刻な危機に見舞われた（ユルゲン・ザルノフスキー、「病院修道会」pp.238～）。サンアントニオ・アバーは聖アントニオスを指す（アバー Abad とは大修道院長の意）。麦角菌が寄生したライムギパンを食べると中毒がひき起こされ、焼けるような痛さ、赤い炎症をもたらせるため、麦角中毒は「聖なる火」、「地獄の火」とも呼ばれた。この病気とアントニウス会については、神原正明『ヒエロニムス・ボスの図書学』（特に pp.86-107）が詳しい。

(30)　これはよくある名前で、同姓同名の別人物の可能性はあるが、メキシコ市会の議事録によると、1525 年 9 月 26 日に正市民 vecino として受け入れられた（*Actas del Cabildo de la Ciudad de México*[以下、ACCM と略]、t.1、p.57）。A・サンチェスへは 1530 年 1 月 19 日、38 年 1 月 4 日、43 年 3 月 12 日、同 9 月 17 日と同じ地区で土地を追加付与された（*ACCM* II-p.30, IV-p.113, IV-p.332, V-p.5）。なおエンコメンデロの中にこの名は見当たらない（R. Himmerich y Valencia, *The Encomenderos of New Spain*）。イカサの『征服者人名事典』には同姓同名が 2 人いるが別人物（Francisco A. de Icaza）。また、最近発見された 2 つの史料にも彼の名は見当たらない（MartínezMartínez、ならびに Martínez y Grunberg）。

(31)　司教への報告については Zimmermann, *op.cit.*, p.14。サンチョ・サンチェス・デ・ムニョンについては Schwaller, *Origins of Church Wealth in Mexico*, pp.66～71。1559 年から大司教区の神

学教授、68 年から 75 年までメキシコ教会の代表としてスペインに滞在し、帰墨後は大司教代理を務めた。氏名から判断するとこの 2 人とアロンソ・サンチェスは姻戚かもしれない。

(32)　他の病院については、時々言及があるものの、「サンアントニオ・アバー病院」の話は出てこない。メキシコ大司教モントゥファルは、この庵が火の病気の患者に対して奇跡を起こすとして人気を博していると述べているが、治療活動については言及していない（Alonso de Montúfar, Carta al rey, del arzobispo de México, *Epistolario de Nueva España*、t.XI、p.89）。

(33)　この辺りの事情は『日記』末尾に、シグエンサ・イ・ゴンゴラ（チマルパイン死後、17 世紀末まで彼の『日記』などを所有していた）が転記したグレゴリオ・M・デル・ギホ（1606～76）の『日記』に出てくる。ギホの『日記』は 1648 年～1664 年分が公刊されているが、それ以前の日記は現存しない。なお、1524 年 1 月 15 日にメキシコ市で暴動がおこり、宮殿から逃げ出した副王はフランシスコ会修道院に逃げ込み、秋まで匿われていた。アウグスティヌス会の一件は、副王とその対抗勢力のアウデエィエンシアならびに大司教とが綱引きをしている最中に起こったことになる。それまで托鉢修道会とは協調路線を採っていた副王だが、さすがにこの暴挙は容認できなかったようである。

(34)　チマルパインはまだ元気であったにもかかわらず、『日記』は 1616 年以降、執筆されていない。執筆活動を止めたわけではなく、いくつかの『歴史報告書』はその後、執筆された。

(35)　『日記』、p.25、2 月 20 日の行間から右余白、下余白に及ぶ。

(36)　Vetancurt, *Menologio franciscano*, pp.17～24。ベタンクールはトルケマーダの『アパリシオ伝』を 1600 年刊としているが、正しくは 1602 年で 05 年に再版（José Alcina Franch, Juan de Torquemada, 1564 – 1624, p.271）。セバスティアン師は 1625 年に「神の僕 siervo de Dios」となり、1790 年には列福された（Rubial García、*La santidad controvertida*、p.86）。

(37)　グレゴリオ・ロペスが「神の僕」となるのは 1675 年で、列福に至らなかった（*loc. cit.*）。なお、彼の生涯とロサの伝記について詳しくは、Rubial García、*op.cit.*、pp.93～128。

(38)　『第七報告書』の 1542 年 7 月 4 日にはグレゴリオ・ロペスの誕生、89 年 5 月 22 日には彼がサンタフェの荒野へ移り住んだという記事がある。こちらの記事はナワトル語で書かれているが、ロサの『伝記』とよく似た表現も使われている。

(39)　『日記』、fol.18v。『日記』のこの部分は 1971 年に Reyes García（p.340, p.344）によりメキシコで発見された。BnF は 1589 年 11 月 29 日から始まるが、その直前の 1577 年 1 月から 89 年 8 月 5 日までの 4 ページ分である。他の史料と一緒に合わされ、フォリオ表記になっている。なお原テクストのフォトコピーが不鮮明なため、ここはレイェス・ガルシアの翻刻による。

(40)　『日記』、p.18（1596 年 7 月 20 日）。ここで、この 7 月 20 日がカルメル会の創始者聖エリヤ（同会が指導者にして父とした預言者）の祝日であり、グレゴリオ・ロペスはまさにカルメル会の理想像（独居・観想）を実現したとして、カルメル会と関連づけているのは、ロサが後にカルメル会の教会の司祭になったことと無縁ではなかろう（Rubial García,*op.cit.*, p.106）。

(41)　3 つ目のスペイン語の加筆©と同じページに、ナワトル語で加筆された文がある。メキシコ市のサンイポリト精神病院（救貧院や養老施設も兼ねていた）に関するもので、この病院もワステペックの病院と同じく、ベルナルディーノ・アルバレスが建てたものである。記事によると、この病

院で世話をしている人のうち 12 人が誓約し、兄弟会入会の儀式が副王や聴訴官も列席の上、執り行われた。

(42) 『日記』、p.198（1612 年 12 月）

(43) Rubial García, *op.cit.*pp.100-102

(44) Francisco Losa, *Vida del sieruo de Dios Gregorio Lopez*, 1727。上の文Ⓐは同書 p.43[73]、文Ⓑは p.35[65]、文Ⓒは p.163[193]で、下線部は直接引用（p.は 1613 年版の、[ ]は 1727 年版のページを示す）。英語版はⒸのスペイン語について、字はチマルパインのものだが、かなり凝った文で、18 世紀後半のナワトル語話者のスペイン語のようだと評している（英語版、p.232、注 1)。

(45) 『日記』と『第七報告書』の関係、後者の執筆時期については拙稿「チマルパインと 1608 年」の p.17 以下を参照されたい。

(46) 前号で見たように、自らに「ドン」を付け始めたのも 1613 年の記事以降であった。このように綴りだけでなく、新しい語の使用や意味の変化も合わせて分析する必要がある。例えば、「自分たち先住民」という時、チマルパインは「インディオ」という語を使わず、“timacehualtin”「我々平民」と言っていたが、1615 年 3 月 7 日（『日記』、p.270）で初めて、そして 1 度だけ“indio”を使っている。

図版の出典

図版 a、b、b'、c、c'、d、e ［*Diario de Dn. Domingo de San Antón Muñón Chimalpahin*, No.220, Bibliothèque Nationale de France (Source gallica.bnf.fr Département des Manuscrits), ］

図版 d'、e'、f ［Francisco Losa, *Vida del sieruo de Dios Gregorio Lopez*, 1727, Biblioteca Nacional de España (Biblioteca Digital Hispánica)］

参考文献

一次資料

Actas de cabildo de la ciudad de México, vols.1～6, 1889～

Bibliothèque Nationale de France

----- *Diario de Dn. Domingo de San Antón Muñón Chimalpahin*, No.220,　Source gallica.bnf.fr Département des Manuscrits

Chimalpáhin, Domingo,　*Las ocho relaciones y el Memorial de Colhuacan*, paleografía y traducción por Rafael Tena, Consejo Nacional para la Cultura y las Artes（以下、CONACULTA）、México, 2 vols., 1998

----- *Diario*, paleografía y traducción por Rafael Tena, CONACULTA,　México, 2001

Chimalpain Cuauhtlehuanitzin,

----- *Séptima Relaciones de las Différentes Histoires Originales*, ed. de Josefina García Quintana, UNAM, México, 2003

Chimalpahin Quauhtlehuanitzin, don Domingo de San Antón Muñón,

----- *Annals of His Time*, edited and translated by James Lockhart, Susan Schroeder and Doris Namala, Stanford University Press, 2006

----- "Lineage of the Valderrama de Moteuccomas and the Sotelo de Moteuccomas"　in *Codex Chimalpahin : Society and Politics in Mexico Tenochtitlan, Tlatelolco, Texcoco, Culhuacan, and Other Nahua Altepetl in Central Mexico*, vol.2, ed. and trans. by Arthur J. O. Anderson and Susan Schroeder, University of Oklahoma Press, 1997

Guijo, Gregorio M. del

----- *Diario 1648-1664*, Editorial Porrúa, 1953

Hanke, Lewis ed.

----- *Los virreyes españoles en América durante el gobierno de la casa de Austria, México, III*, Biblioteca de Autores Españoles, 1977

Icaza, Francisco　A. de

----- *Diccionario autobiográfico de conquistadores y pobladores de Nueva España*, Edmundo Aviña Levy, 1969(1923)

Losa, Francisco

----- *Vida del sieruo de Dios Gregorio Lopez*, 1727（Biblioteca Nacional de España, Biblioteca Digital Hispánica）

Mendieta, Gerónimo de

----- *Historia eclesiástica Indiana*, Porrúa, 1971

Martínez, Henrico

----- *Reportorio de los tiempos e historia natural de esta Nueva España*, CONACULTA, 1991

Montúfar, Alonso de

----- Carta al rey, del arzobispo de México, 20 de abril de 1570, *Epistolario de Nueva España*, t.XI, pp.89-90, 1940

Torquemada, Juan de

----- *Monarquía Indiana*, 3 vols., Porrúa, 1975

Vetancurt, Agustin de

----- *Menologio franciscano* en *Teatro mexicano*, Porrúa, 1971

アコスタ、ホセ・デ

----- 『新大陸自然文化史』（上・下）　大航海時代叢書 III、IV　岩波書店、1966

Amoxcalli　La Casa de los Libros、（DVD）　Centro de Investigaciones y Estudios Superiores en Antropología Social、2009

研究書

Alcina Franch, José　Juan de Torquemada, 1564 – 1624, in Robert Wauchope ed. *Handbook of Middle American Indians*, vol.13, University of Texas Press, 1973

Departamento del Distrito Federal　*Guía de las Actas de Cabildo de la Ciudad de México, siglo XVI*, Fondo de Cultura Económica (以下、FCE), 1970

Himmerich y Valencia, Robert　*The Encomenderos of New Spain, 1521-1555*, University of Texas, 1991

Israel, Jonathan I.　*Razas, clases sociales y vida política en el México colonial, 1610-1670*, FCE, 1980

Launey, Michel　*Introducción a la lengua y a la literatura náhuatl*, UNAM, 1992

Martínez Martínez, María del Carmen　*Veracruz 1519　Los hombres de Cortés*, Universidad de León, CONACULTA, INAH, 2013

Martínez, María del Carmen y Bernard Grunberg　"Lista de conquistadores de la Nueva España y de los votos que emitieron en la elección de procuradores (México, 9 de enero de 1529)", *Estudios de Historia Novohispana* 56 (2017), pp.96-108

Muriel, Josefina　*Hospitales de la Nueva España*, 2 vols., (vesrión en línea: http://www.historicas.　unam.mx/publicaciones/publicadigital/libros/hospitales

Rubial García, Antonio　*La santidad controvertida　Hagiografía y conciencia criolla alrededor de los venerables no canonizados de Nueva España*, UNAM y FCE, 1999

同　*Profetisas y solitarios　Espacios y mensajes de una religión por ermitaños y beatas laicos en las ciudades de Nueva España*, UNAM y FCE, 2006

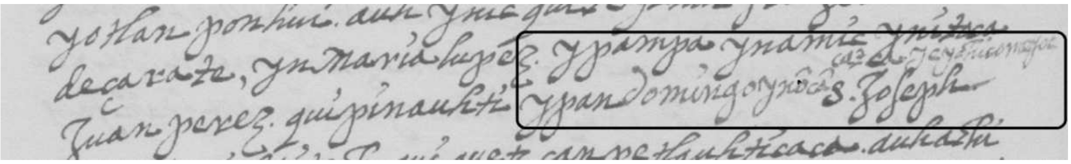
Schwaller, John Frederick　*Origins of Church Wealth in Mexico　Ecclesiastical Revenues and Church Finances, 1523-1600*, University of New Mexico, 1985

Schroeder, Susan　"Introduction" to *Annals of His Time*, edited and translated by James Lockhart, Susan Schroeder and Doris Namala, Stanford University Press, 2006

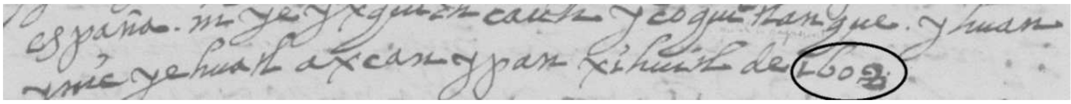
Thomas, Hugh　*¿ Quién es quién de los Conquistadores ?*　Barcelona, 2001
Toribio Medina, José　*Historia del Tribunal del Santo Oficio de la Inquisición en México*, UNAM & Miguel Angel Porrúa, 1987
Zimmermann, Günter　“Chimalpahin y la iglesia de San Antón Abad en México”, *Traducciones Mesoamericanas*, t. 1　(1966), p.11-26, Sociedad Mexicana de Antropología
神原正明　『ヒエロニムス・ボスの図像学　阿呆と楽園に見る中世』、人文書院、1997
グリーン、トビー　『異端審問　大国スペインを蝕んだ恐怖支配』（小林朋則訳）、中央公論新社、2010
小池寿子　「病をいやす絵　注文者「聖アントニオ修道会」がめざしたもの」（『芸術新潮』2015 年 8 月号）、pp.64-69
ザルノフスキー、ユルゲン　「病院修道会」pp.237～252　P.ディンツェルバッハー・J.L.ホッグ[編]『修道院文化史事典』（朝倉文市[監訳]、八坂書房、2008
篠原愛人　「チマルパインと 1608 年」、『摂大人文科学』第 22 号、pp.1～35、2014
同　　　　「チマルパインと「クリオーリョ」」、同　第 23 号、pp.1～24、2015
同　　　　「チマルパインと「ドン」」、同　第 24 号、pp.1～29、2016
ラペサ、ラファエル　『スペイン語の歴史』（山田善郎監修、中岡省治、三好準之助訳）　昭和堂、2004
渡邊　昌美　『異端審問』（講談社現代新書　1312）、講談社、1996

図版 a：空白部への書き込み（『日記』、p.160、1612 年 1 月 21 日）

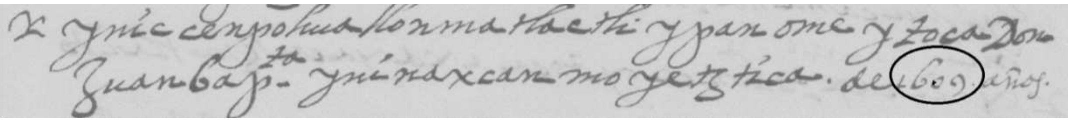
四角で囲った部分の 2 行目 “ypan” と “S. Joseph” の間に薄いインクで “domingo yn oca catca yc ychicomeyoc” と書き加えられている。



図版 b：1609 の “9” を “8” に上書き修正（『日記』、p.107、「史的回顧」）

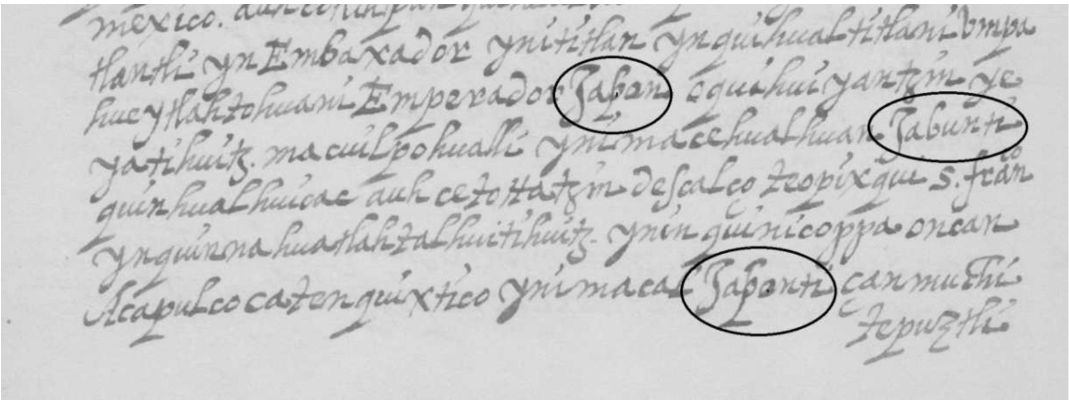


図版 b’：本来の 1609（『日記』、p.106、「史的回顧」）



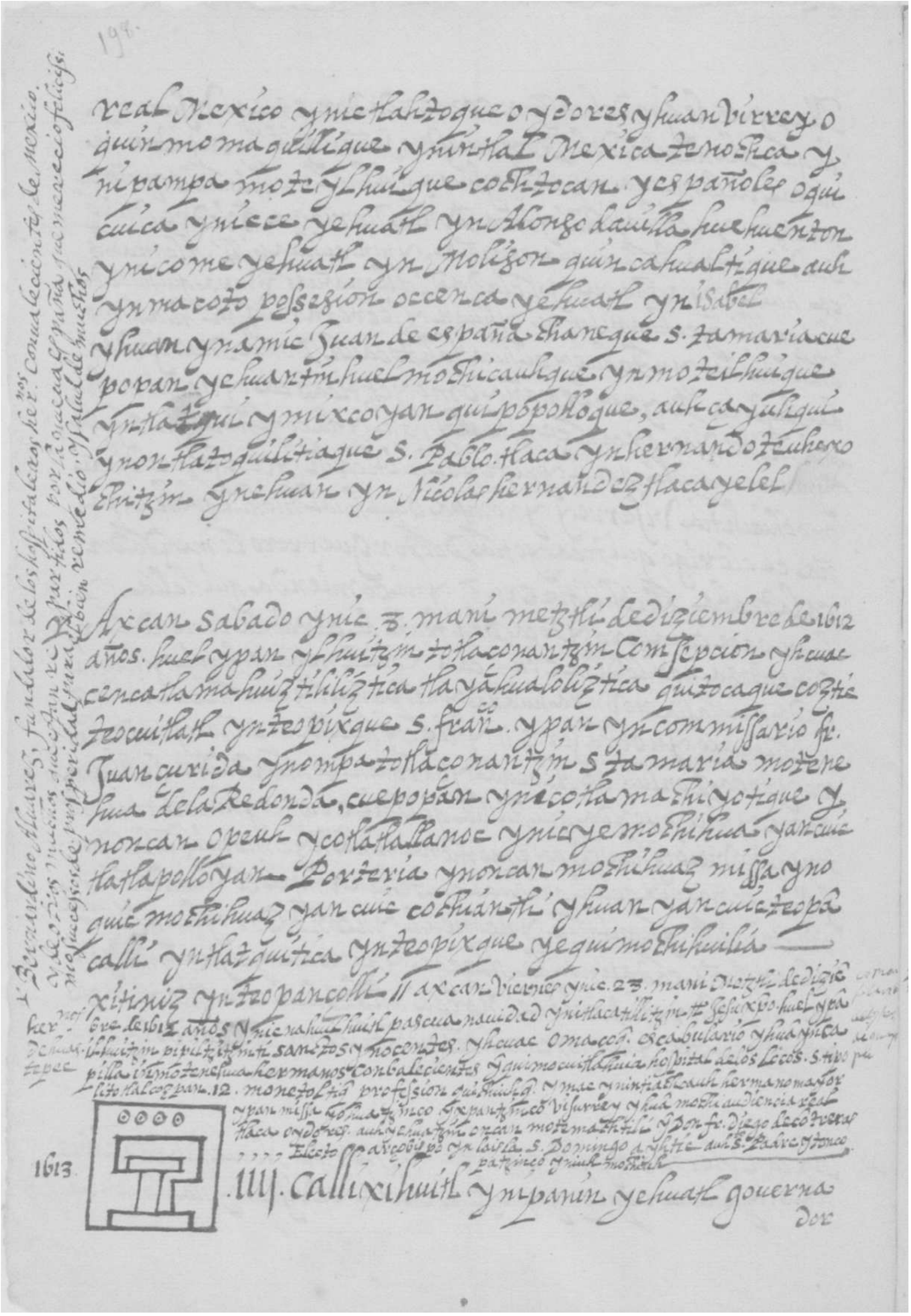
図版 c：「日本」の b を p に上書き修正（『日記』、p.242、1614 年 3 月 4 日）

1 つ目と 3 つ目は b を p に上書き修正しているが、2 つ目は Jabunti のまま



図版 d：上～右の余白にグレゴリオ・ロペスの訃報（『日記』、p.18、1596 年 7 月 20 日）

図版 e：左余白「B・アルバレスの病院」（『日記』、p.198、1612 年 12 月）



図版 d’ : G・ロペス死去（F・ロサ『伝記』、p.35）

Sucediò eſta muerte,ò nue-
va vida, Sabado al medio dia , à
veinte de Julio del año de mil
y quinientos y noventa y ſeis,
dia en que la Sagrada Religion
de los Padres Carmelitas cele-
bran la fieſta del Santo Elias,Pri-
mer Padre,y Fundador de la vi-
da ſolitaria , la qual Gregorio
Lopez tan perfectamente avia
ſeguido.

図版 e’ : B・アルバレスの病院（F・ロサ『伝記』、p.163）

con ojos humanos , parecia im-
poſsible, y fuera de camino. Pe-
ro era tanto el animo de Bernar-
dino Alvarez , Fundador , no
ſolo de aquel Hoſpital,mas tam-
bien de el de los Convalecien-
tes de Mexico , y de otros mu-
chos que eſtàn repartidos por la
Nueva-Eſpaña , que mereciò
feliciſsimos ſuceſſos de proſpe-
ridad , para el bien , remedio, y
ſalud de muchos.

図版 f : サンタフェへの移動（F・ロサ『伝記』、p.43）

Habida eſta licencia del Doc-
tor Ortiz , fue Gregorio Lopez
à aquella ſoledad à veinte y dos
de Mayo de mil y quinientos y
ochenta y nueve , ſegundo dia
de Paſcua del Eſpiritu Santo,
donde proſiguiò ſus exercicios
de oracion , y contemplacion,
haſta el dia de ſu muerte.

Summary

"Chimalpahin in Paris"

Today we can read the Chimalpahin's original manuscript of "*Diario*" on line, thanks to the digitalization of the text by the Bibliothèque Nationale de France, in Paris. Through his digitalized text, we can recognize his deletions, corrections, additions and blanks that were not so clearly indicated in former transcriptions of his texts.

Most pages are written in such a neat hand that we suppose this is a nearly final draft based on other former ones. We found the spelling of "Japon" changed 3 times (4 forms) in the *Diario* and sometimes it was corrected by transforming "b"-s into "p"-s. These changes of his spelling may be useful as an indicator of the Chimalpahin's writing process, but not without problems.

By analyzing his texts on San Antonio Abad church, we detected his anxiety about the future of his church, which came true in 1624 when the patron of the church died and Augustinian order invaded to occupy it.

Finally, his 3 additions on Gregorio López, so-called living saint of the 16th century Mexico, are written, unlike other parts of his text, in Spanish. We probed these are literal quotations from Francisco Losa's "*Biography of Gregorio Lopez*" (1613).